

五銖銭の鑄造額

宮澤知之

〔抄録〕

前漢における五銖銭の鑄造額は、『漢書』食貨志に見える「二百八十億万餘」が唯一の資料である。従来、この額に関して280億銭説と2800億銭説があるが、どちらの説についても信頼すべき論証はなされていない。本稿は「億万」なる単位を、經典の注疏の解釈および法数（位取り単位）の両面から検討し、「億万」とは、〇億〇万の省略であること、漢代の億は 10^8 であることを論証し、それゆえ五銖銭鑄造額は280億銭であることを確定する。また漢代の「巨万（鉅万）」なる単位も億と同義であることを述べる。

キーワード 前漢 五銖銭 鑄造額 億万 巨万

緒言

前漢における五銖銭の鑄造額に関する資料は、『漢書』食貨志下の次の記事が唯一のものである。

自孝武元狩五年三官初鑄五銖銭、至平帝元始中、成銭二百八十億万餘云。

孝武元狩五年、三官初めて五銖銭を鑄して自り、平帝元始中に至るまで、銭を成すこと二百八十億万餘と云う。

この記事に矛盾のあることは周知の通りである。元狩5年（前118）は郡国での五銖銭鑄造が始まった年であり（『史記』平準書、『漢書』武帝紀）、郡国での五銖銭鑄造を禁止し上林三官で鑄造するようになったのは元鼎4年（前113）であるからである（『史記』平準書、『漢書』食貨志下）。鑄造総額を把握しやすいのは上林三官であろうから、元狩5年でなく元鼎4年と理解した方がよいと考えるが、一方平帝の元始年間（後1－5）も5年間あり、五銖銭「二百八十億万餘」の鑄造期間を厳密に決めることは結局できない。そこで、この記事の矛盾は無視することとすると、五銖銭「二百八十億万餘」の鑄造期間は最短で114年、最長で123年間となる。計算上120年間とし、一年平均鑄造額を求めると約2.3億万である。

これらの数値をめぐって従来、中国の学界には二つの説がある。すなわち「二百八十億万」を280億銭（年平均2.3億銭）とする説と、2800億銭（年平均23億銭）とする説である。ちなみに唐宋における、おおよその年平均鑄造額は、唐が2億銭（20万貫、1貫は1000銭）、北宋が20億銭（200万貫）である。280億銭説は唐の水準に近く、2800億銭説は宋の水準に近いと認識することになる。つまり年間鑄造額に着目した限りではあるが、二つの説は漢代の貨幣経済の水準が後世と比較してどの程度の規模であるかという問題に関わって論議されているのである。

これに対して日本の学界では、「二百八十億万」を280億銭と解することにとくに疑問が呈せられたことはないようである。だが「二百八十億万」=280億銭が積極的に証明されたこともなく、自明のこととして前提されているように私には見える。

ところで貨幣経済の内容・水準を見きわめるためには、銅銭にだけ注目するのは不十分である。漢代なら、布帛や金もあわせて考察しなければならない。⁽¹⁾ その意味では、五銖銭の鑄造額の問題は、漢代貨幣経済の研究にとって第一義的なテーマにならないとも言える。しかし貨幣経済の質を考察する上で、貨幣自体の属性の問題は大きい意味をもつ。布帛等の実物貨幣はもちろん、金属貨幣でも秤量貨幣と計数貨幣では、貨幣としての属性が異なるからである。私見では、小額銅銭は納税手段、財政運用の手段として機能し、国家による社会経済の統合のための手段としてもっとも統制しやすいものであるのに対し、実物貨幣や秤量貨幣は国家の統制が計数貨幣である銅銭よりも困難な貨幣である。⁽²⁾ このような小額の銅銭をどの程度、漢王朝が財政運用に投入したかが問題である。かりに見銭での財政運用部分の規模が同じであれば、280億銭と2800億銭では、見銭の国庫支出と国庫への還流の回数、すなわち見銭の回転速度に大きな開きが出るのは明らかである。280億銭の方が、財政支出と還流をより速やかに運用しうるシステムが準備されていなければならない。その意味で280億銭か2800億銭かという問題は、漢王朝の財政運用・社会経済統合がどのような形で遂行されたかという関心からは看過できない面をもっている。多くの研究者は280億銭説に立ち、2800億銭説は少数派である。しかし少数派にせよ、2800億銭が主張されている。私は2800億銭説が本当に成り立つ余地があるのか、確認しておきたいと思う。なお唐宋の貫で表示すると、280億銭は2800万貫、2800億銭は2億8000万貫である。

1 「二百八十億万餘」をめぐるとの学説

前述のように中国では、二つの説が対立する。まず積極的に280億銭か2800億銭かを論証しようとする代表的な議論の主要な論点（要約）を紹介する。

[280億銭説]

胡寄窗『中国経済思想史』中巻（上海人民出版社、1963年）148頁。

一般には億は十万と理解されるが、そうすると「二百八十億万」は2800億銭となる。人口6000万人から計算すると、一人当たり4500銭、一戸当たり22500銭となり多すぎる。毎年

20万万銭以上の鑄造の可能性はあまりない。従って億万の億字は万字の誤りである。280万万なら政府所有の80万万を除く流通現金は一人当たり340銭、一戸当たり1600-1700銭で比較的合理的である。200万万の官銭でも非常に多い。自然経済が主要な封建社会では中小地主、自作農民の貨幣需要はきわめて少なく、200万万銭の絶大部分は豪族地主と大商人の間をめぐるだけである。

沈長雲「漢代史籍中の“億万”、“巨万”究竟指多少」(『文史』48、1999年)。

『礼記』王制の、

方千里者、為方百里者百、為田九万億畝。

は「方千里は方百里の百倍、方百里為田九十億(即九百万)畝、乘以一百、正是九万万畝、然《礼記》謂九億万畝、正説明万億是万万の同義詞。」と解釈でき、王制経文に附せられた鄭玄注「万億、今万万也」と一致する。故に、漢代の「億万」は万万の同義語であることは疑いない。また「億万」が万万であるからには、『史記』『漢書』に見える「巨万」「鉅万」は千万の意である。

[2800億銭説]

王献唐『中国古代貨幣通考』(齊魯書社、1979年) 1388-91頁。

「億万」とは億箇ある万を単位としたものだが、億の数については古来三種ある。上中下の三等である。古典に徴すると、十万を億とする場合(下数)と、万万を億とする場合(中数)があるほか、下数が古数で中数が今数であると説明するものもある。平準書は億と巨万を明確に区別するが、巨万は万万の意(平準書韋昭注)だから、平準書の億は十万の意味(当時京師計億の数)であり、塩鉄論の億万は丞相御史の言だからやはり億は十万であり、班志の記載は官簿に基づくからやはり十万である。億が十万であれば、億万は十万万、すなわち「二百八十億万」は2800億である。

秦暉「関于西漢五銖銭の流通数額問題」(『陝西師大学報』1998年2期)。

億は当時十万を言う。従来、「億万」の万字を衍字とみるか、「億万」は「万万」の誤記と見るかのどちらかであるが、衍字説については、小さい単位を衍字とみる根拠はなく、誤記説は可能性が低い。2800億銭の五銖銭の鑄造を歴史的社會經濟的必然と見て、封建的自然經濟に含められないその經濟の意味を考察することが重要である。

以上の議論を振り返ると、胡寄窗氏は漢代の億は十万の意味であるが、それでは2800億銭となって多すぎるから、億万の億字は万字の誤りであるとし、秦暉氏は胡寄窗氏が2800億銭では多すぎるとする論拠を逐一批判して、億=十万(2800億銭)を前提にして漢代の封建經濟を考えるべきとし、王献唐氏は、億=十万説と億=万万説があることを指摘したうえで、億=十万説をとり、億万(つまり十万万)は巨万=万万の上位の単位とし、沈長雲氏は、他の三人が億=十万説を取るのに対し、鄭玄が『礼記』王制篇につけた万億=万万説を採用して二百八十億万=二百八十万万と考え、さらに巨万は千万の意とする。これから見ると、280億銭か2800億

銭かの分岐点は、「億万」という単位をめぐって、衍字（万字が衍字）ないし誤記（億字が万の誤記）とするか（280億銭説）、億は十万であるから億万は十万万とするか（2800億銭説）の二者択一の傾向の強いことが分かる。

2 億の注釈

沈長雲氏を除くと、億とは十万の意味であると考えられてきた。しかし王猷唐氏が指摘するように漢・三国時代に付けられた「億」に関する注釈は、万万を億とするものがある⁽³⁾。たとえば、『詩経』魏風、伐檀の「不稼不穡胡取禾三百億兮」の毛亨伝には「万万曰億」とある。この部分、鄭玄箋は「十万曰億」である。

億を十万と解するのは鄭玄であるが、毛亨は万万と解する。三国呉の人韋昭は『国語』に注して、漢の賈逵・三国の唐固は億を万万と解し、鄭玄は十万と解すると言ったうえで、十万とするのは古数に従い、今人は万万を億とするという⁽⁴⁾。さらに『詩経』魏風、伐檀の孔穎達の疏は、億の二つの解釈について、

正義曰、万万曰億、今数然也。伝以時事言之、故今九章算術皆以万万為億。

正義曰、箋以詩書古人之言、故合古数言之。知古億十万者、以田方百里於今数为九百万畝、而王制云、方百里為田九十億畝、是億為十万也。故彼注云、億今十万。是以今曉古也。楚語云、百姓千品万官億醜、皆以数相十。是億十万也。詩内諸言億者、毛鄭各從其家。故楚茨箋伝与此同。（阮元の校勘記によって改めたところがある）

正義に曰く、万万を億と曰うは、今数も然るなり。（毛亨）伝は時事を以て之を言う、故に今九章算術皆な万万を以て億と為す。

正義に曰く、（鄭玄）箋は詩書は古人の言なるを以て、故に古数に合わせて之を言う。古の億が十万なるを知るは、田方百里は今数に於いて九百万畝為り、而れども王制に「方百里は田を為すこと九十億畝」と云う、是れ億は十万為るを以てなり。故に彼（王制）の注に云う、億は今の十万なりと。是れ今を以て古を曉らかにするなり。楚語に、百姓・千品・万官・億醜と云うは、皆な数を以て相い十す。是れ億は十万なり。詩内の諸の億と言う者、毛・鄭各おの其の家に従う。故に楚茨の箋・伝、此れと同じ。

と言う。唐の孔穎達は、万万を億という毛亨は当時（漢）の意味で説明したのに対し、十万を億という鄭玄は詩の古意で説明したと言うのである。つまり鄭玄は漢代の億について言及していないと考えられるのである。王猷唐氏は億の解釈に二通りあることを指摘し、さらに億=十万は古数、億=万万は今数とする注釈の存在を指摘しながら、官簿にもとづく億は十万の意味であるとした。しかし、私は韋昭の注や孔穎達の疏を重視し、漢代における億は万万の意味であると見るのが自然である⁽⁵⁾。それなら億=十万を前提にして、「二百八十億万」を解釈するのは根拠が乏しいことになる。

ところでもっとも新しい説である沈長雲氏の説では、億=十万説を採用していない。そこで

氏の論拠を確認しておこう。氏が引用する『礼記』王制篇と鄭玄注は次のようである。

方一里者、為田九百畝（一里方三百歩）。方十里者、為方一里者百、為田九万畝。方百里者、為方十里者百、為田九十億畝（億今十万）。方千里者、為方百里者百、為田九万億畝（万億今万万也）。（ ）は鄭玄注

方一里なる者は、田を為すこと九百畝（一里は方三百歩）。方十里なる者は、方一里なる者百と為し、田を為すこと九万畝。方百里なる者は、方十里なる者百と為し、田を為すこと九十億畝（億は今の十万）。方千里なる者は、方百里なる者百と為し、田を為すこと九万億畝（万億は今の万万なり）。（ ）は鄭玄注

この『礼記』王制の経文は、古来誤りが指摘されている部分である。孔穎達の疏はいう。

正義曰、計千里之方、為方百里者百、一箇百里之方既為九十億畝、則十箇百里方為九百億畝。百箇百里方為九千億畝。今乃云九万億畝、与数不同者。若以億言之、当云九千億畝。若以万言之、当云九万万畝。但書經戦国及秦之世、経藉（籍）錯乱。此経上下或億或万、字相交渉、遂誤為万億。鄭未注之前、書本既爾。鄭更不顯言其錯。因此錯本万億之言、即云此経万億者、即今之万万。皇氏以為億数不定、或以十万為億、或以万万為億、或以一万為億。此云万億者、祇是万万也。六国時或将万為億、故云万億。但古事難委、未知孰是、故備存焉。

正義に曰く、計るに「千里の方、方百里なる者百と為す」とあるは、一箇の百里の方は既に九十億畝為れば、則ち十箇の百里方は九百億畝為り、百箇の百里方は九千億畝為り。今乃ち九万億畝と云い、数と同じからざる者あり。若し億を以て之を言わば、当に九千億畝と云うべし。若し万を以て之を言わば、当に九万万畝と云うべし。但だ書は、戦国及び秦の世を経て、経藉（籍）錯乱す。此の経の上下、或いは億或いは万、字相い交渉し、遂に誤って万億と為す。鄭未だ注せざるの前、書本既に爾り。鄭更に其の錯を顯言せず。此の錯本の万億の言に因って、即ち此の経の万億とは、即ち今の万万なりと云う。皇氏以為えらく、億数は定らず、或いは十万を以て億と為し、或いは万万を以て億と為し、或いは一万を以て億と為す。此に万億と云うは、^{まさ}祇に是れ万万なり。六国の時或いは万を將つて億と為す、故に万億と云う、と。但だ古事は委にし難し、未だ孰れが是なるやを知らず、故に備に焉に存す。

孔穎達は後半部分で若干の留保を付けるものの、『礼記』王制の「為田九万億畝」は、「九千億畝」または「九万万畝」とあるべきものが錯乱の結果、「九万億」になったもので、鄭玄は経文を修正せずに、「万億は万万」の意味だと述べたという。たしかに鄭玄は経文の「為田九十億畝」に対しては「億は今の十万」と言っており、「万億」が単位として万万と等しいと言うのではなく、経文に誤りがあるにしろ、あるべき本来の文意は万万だと言っているのである。従って沈長雲氏が万億は万万と同義であるというのは誤りである。まして万億が億万と同じだという前提は単なる憶測に過ぎない。沈氏の議論が万億＝億万と置き換えるのは、万×億＝億

×万と考えているからであろう。ところで氏の論の「為田九十億（即九百万）畝」という箇所では、90億=90×10万=900万と計算している。すなわち1億=10万である。氏の主張である万億=億万=万万では、1億=1万であるから完全に矛盾である。氏の二百八十億万=280億銭説は論拠が崩れる。沈氏の280億銭説の根拠が崩れると、現在のところ280億銭説を明確に論証したものはなくなる（胡氏は単なる誤字説である）。

このように、億=十万説も、億万=万億=万万説も、どちらも採用すべきではない。ではどのように考えたらよいであろうか。

3 法 数

中国では古来、億万千百十などの位取り単位（法数）には三種類ある。北周甄鸞の『五経算術』上、尚書孝経兆民注数越次法に言う（旧題漢徐岳撰、北周甄鸞注『数術記遺』も同じ）。

按黄帝為法数、有十等。及其用也、乃有三焉。十等者、億、兆、京、垓、秭、壤、溝、澗、正、載也。三等者、謂上中下也。其下数者、十变之。若言十万曰億、十億曰兆、十兆曰京。中数者、万万变之。若言万万曰億、万万億曰兆、万万兆曰京也。上数者、数窮則变。若言万万曰億、億億曰兆、兆兆曰京也。

按ずるに黄帝、法数を為り、十等有り。其の用に及ぶや、乃ち三有り。十等とは、億・兆・京・垓・秭・壤・溝・澗・正・載なり。三等とは、上中下を謂うなり。其れ下数は、十之を変ず。十万を言いて億と曰い、十億を兆と曰い、十兆を京と曰うが若し。中数は、万万之を変ず。万万を言いて億と曰い、万万億を兆と曰い、万万兆を京と曰うが若きなり。上数は、数窮まらば則ち変ず。万万を言いて億と曰い、億億を兆と曰い、兆兆を京と曰うが若きなり。

下って明の朱載堉『楽律全書』巻26、大数に次のように言う。

大数有三等。下等者、十万為億、十億為兆、十兆為京之類是也。

中等者、万万為億、万万億為兆、万万兆為京之類是也。

大抵儒書中所載者下等也。算書中所載者中等也。其上等者未詳所載。而仏経中則又与此三等不同。今所用者、特依算書用中等之数耳。

大数に三等有り。下等なる者は、十万を億と為し、十億を兆と為し、十兆を京と為すの類是れなり。

中等なる者は、万万を億と為し、万万億を兆と為し、万万兆を京と為すの類是れなり。

大抵、儒書中載する所の者は下等なり。算書中載する所の者は中等なり。其の上等なる者は未だ載する所を詳らかにせず。而して仏経中は則ち又た此の三等と同じからず。今用いる所の者は、特に算書中等の数を用いるに依るのみ。

これらの記述をもとに、三等の法数と、参考のために現代の数の単位を表示しておこう（表参照）。

下数			
10^0 (一)	10^1 (十)	10^2 (百)	10^3 (千)
10^4 (万)	10^5 (十万=億)	10^6 (十億=兆)	10^7 (十兆=京)
中数			
10^0 (一)	10^1 (十)	10^2 (百)	10^3 (千)
10^4 (万)	10^5 (十万)	10^6 (百万)	10^7 (千万)
10^8 (万万=億)	10^9 (十億)	10^{10} (百億)	10^{11} (千億)
10^{12} (万億)	10^{13} (十万億)	10^{14} (百万億)	10^{15} (千万億)
10^{16} (万万億=兆)	10^{17} (十兆)	10^{18} (百兆)	10^{19} (千兆)
10^{20} (万兆)	10^{21} (十万兆)	10^{22} (百万兆)	10^{23} (千万兆)
10^{24} (万万兆=京)			
上数			
10^0 (一)	10^1 (十)	10^2 (百)	10^3 (千)
10^4 (万)	10^5 (十万)	10^6 (百万)	10^7 (千万)
10^8 (万万=億)	10^9 (十億)	10^{10} (百億)	10^{11} (千億)
10^{12} (万億)	10^{13} (十万億)	10^{14} (百万億)	10^{15} (千万億)
10^{16} (億億=兆)	10^{17} (十兆)	10^{18} (百兆)	10^{19} (千兆)
10^{20} (万兆)	10^{21} (十万兆)	10^{22} (百万兆)	10^{23} (千万兆)
10^{24} (億兆)	10^{25} (十億兆)	10^{26} (百億兆)	10^{27} (千億兆)
10^{28} (万億兆)	10^{29} (十万億兆)	10^{30} (百万億兆)	10^{31} (千万億兆)
10^{32} (億億兆=兆兆=京)			
現代の数の単位			
10^0 (一)	10^1 (十)	10^2 (百)	10^3 (千)
10^4 (万)	10^5 (十万)	10^6 (百万)	10^7 (千万)
10^8 (億)	10^9 (十億)	10^{10} (百億)	10^{11} (千億)
10^{12} (兆)	10^{13} (十兆)	10^{14} (百兆)	10^{15} (千兆)
10^{16} (京)			

すでに述べたことと合わせると、下数にもとづく法数の構成によると、億=十万であり、儒書に多く見られ、漢より前の古数である。鄭玄は古の意味を明らかにするために、「古の億は今の十万に相当する」と言った。中数にもとづく法数では、億=万万であり、算書が用いるものである。これは漢代の今数であり、毛亨らは、億の字義を漢代の意味で説明したのである。

さて表によると、興味深い事実が判明する。すなわち「万億」という単位は、中数・上数で存在するが、いずれも 10^{12} すなわち現代の1兆に相当する。これを「二百八十億万」に適用すると、280兆である。一方「億万」という単位は、どの法数を用いても存在しない。⁽⁶⁾

4 「億万」とは何か

では「億万」とは何か。参考すべき例が後世にある。まず『南齊書』巻3、永明5年9月己

丑条に、

京師及四方出銭億万、糶米穀絲綿之属、其和價以優黔首。

京師及び四方銭億万を出だして、米穀絲綿の属を糶し、其れ價を和し以て黔首を優す。

とあり、「億万」が見える。この内訳は『通典』巻12、食貨典に（『冊府元龜』巻502、嘗平に同じ記事があるが、文章にやや異同あり）、

齊武帝永明中、天下米穀布帛賤。上欲立常平倉、市積為儲。六年詔、出上庫錢五千万、於京師市米、買絲綿紋絹布。揚州出錢千九百一十萬、南徐州二百万、各於郡所市糶。南荊河州二百万、市絲綿紋絹布米大麥。江州五百万、市米胡麻。荊州五百万、郢州三百万、皆市絹・綿・布・米・大小豆・大麥・胡麻。湘州二百万、司州二百五十萬、西荊河州二百五十萬、南兗州二百五十萬、雍州五百万、市絹綿布米。使臺伝並於所在市易。

齊武帝永明中、天下の米穀布帛賤し。上、常平倉を立て、市積して儲と為さんと欲す。六年、詔す。上庫の錢五千万を出し、京師に於いて米を市い、絲綿紋絹布を買え。揚州は錢千九百一十萬を出し、南徐州は二百万、各おの郡所に於いて市糶せよ。南荊河州は二百万、絲綿紋絹布米大麥を市え。江州は五百万、米胡麻を市え。荊州は五百万、郢州は三百万、皆な絹・綿・布・米・大小豆・大麥・胡麻を市え。湘州は二百万、司州は二百五十萬、西荊河州は二百五十萬、南兗州は二百五十萬、雍州は五百万、絹綿布米を市え。臺伝をして並びに所在に於いて市易せしめよ。

とあり、出銭の合計は、10060万すなわち1億60万である。また北宋の曾鞏『元豊類藁』巻30、議經費劄子に、

天下歳入、皇祐・治平皆一億万以上、歳費亦一億万以上。

とあり、その内訳は次の通りである。

皇祐元年入一億二千六百二十五万一千九百六十四。（『長編』巻172）

治平二年、内外入一億一千六百十三万八千四百五、出一億二千三十四万三千七百十四。

（『宋史』巻179）

南齊と北宋の例では、「〇億〇万」を略して「〇億万」としており、いずれも億は 10^8 で万の万倍（万万）であることが分かる。これらは、どちらも後世の例であるが、漢代にそのような例は見当たらない。しかし「〇億〇万」あるいは「〇万万〇万」の表記ならいくつかある。

『九章算術』巻4、少広

又有積三十九億七千二百一十五万六百二十五步。問為方幾何。答曰、六万三千二十五步。

『漢書』地理志8下

提封田一万万四千五百一十三万六千四百五頃、其一万万二百五十二万八千八百八十九頃。

「尹灣六号漢墓出土木牘」一反⁽⁷⁾

一歳諸錢入二万万六千六百六十四万二千五百六錢。

一歳諸錢出一万万四千五百八十三万四千三百九十一。

一歳諸穀入五十万六千六百卅七石二斗二升少□升。出卅一万二千五百八十一石四斗□□升。

『九章算術』の億は 10^8 で万万の意味である。『漢書』地理志、「尹湾木牘」は億を使わず万万と表記するが、実質的に『九章算術』と同じである。南齊・北宋の例を参照すると、『九章算術』の例の概数は「三十九億万」と表現できるのではないか。この場合、億万の万は億より小さく万のオーダーで端数のあることを示す。もし同様に『漢書』地理志、「尹湾木牘」の万万を使って概数を表せば「万万万」すなわち 10^{12} になってしまう。 10^8 を意味する位取り単位は、漢代では万万が本来の姿だが、万の位の端数を伴うことを示しながら 10^8 のオーダーで概数表示するときには億万とする以外に方法はなかったのではないだろうか。

5 「二百八十億万餘」の解釈

「億万」なる単位は存在せず、億万が○億○万の省略形の可能性の高いことを述べた。この場合、億と万は掛け合わせて一つの単位となったものではないことを意味する。ところが「万万」という場合は明らかに万の二乗である。そこで「億万」を論じる学説はどれも「億万」についても億と万を掛け合わせたものと見たのである。また既に、鄭玄注の「億=十万」説を採用すべきでないことも論じた。ここでは「二百八十億万」について、再度、億と万を掛け合わせる場合と、○億○万の省略形の場合に分け、さらに鄭玄注と毛亨注の場合に分けて、具体的にどうなるか見てみよう。

億と万を掛け合わせると、

- ① 280,000,000,000銭説 (億=十万、下数、古数、鄭玄)

年平均 2,300,000,000銭

- ② 280,000,000,000,000銭説 (億=万万、中数、今数、毛亨)

年平均 2,300,000,000,000銭

○億○万の省略とみると、

- ③ 28,000,000銭説 (億=十万、下数、古数、鄭玄)

年平均 230,000銭

- ④ 28,000,000,000銭説 (億=万万、中数、今数、毛亨)

年平均 230,000,000銭

の四通りとなる。上数は検討しない (二百八十億万の数なら中数と同じになる)。

従来の解釈では、論証無しに「億万」を 10^8 すなわち現代の1億と解釈する研究者が最も多い。その場合、億は万の誤字、あるいは万は衍字だと見た (胡寄窗)。しかしそれには根拠がない。漢人の注釈を重んじる人は、下数 (鄭玄注) を用いて億を十万とした上で、億万を十万×万、現代の10億と解釈して2800億銭とした① (王献唐、秦暉)。中数 (億=万万) を採用しないのは、億万を万の三乗 (1兆) と解せば280兆②となり、あまりに巨大な数であるから、あり得ないと見なされたと思われる。そこで漢・三国の注釈家の多くが億は万万の意とする事

実や、三国呉の韋昭が「十万曰億。古数也。今人乃以万万為億。」という事実を無視することとなった。

しかし鄭玄注は億は十万というだけであり、億万が億×万であるとは言っていない。億万という単位が存在しない以上、鄭玄注を採用するなら、280億 α 万の略（ $280 \times 10^5 + \alpha \times 10^4$ [α は0から9までの整数]）と見る以外にない③。

億万を○億○万の略と見ると、多くの注釈家がつける万万＝億の場合も成立する④。すなわち（ $280 \times 10^8 + \beta \times 10^4$ [β は0から9999までの整数]）であり、280万万 β 万と表記してもよい。結局、可能性のあるのは③④のみである。③は総鑄造額2800万錢、④は280億錢となり、1000倍の差がある。

どちらが正しいかは、数学的な位取り単位の検討からだけでは不可能だが、前述のように、④は注釈家が今数で漢代の計数方法とすること、③は古数とされるほか、あまりに過少であることを考慮すると、④を採用すべきである。私の結論は、「二百八十億万餘」とは、280億○万餘（餘は万より下位に端数のあることを示す）の省略形と見ることである。漢代の銅錢鑄造統計が、土地統計や歳出入と同様の記述方式をとる官庁の文書資料に由来するものなら、「二百八十億万餘」は『漢書』地理志や「尹灣木牘」の記述方式と同じく、本来「二百八十万万○万餘」とあったはずである。

ところで、漢代史籍には「二百八十億万餘」のほかにも、「億万」の用例が散見する。単に巨大な数値という意味でなく、具体的数値を示すものを列挙する。

- ・宜詳考驗、皆可豫見、計定然後挙事、費不過數億万、亦可以事諸浮食無產業民。（『漢書』卷29、溝洫志）
- ・唐蒙已略通夜郎、因通西南夷道、発巴・蜀・広漢卒、作者数万人。治道二歳、道不成、士卒多物故、費以億万計。蜀民及漢用事者、多言其不便。（『漢書』卷57下、司馬相如伝）
- ・建初三年、拜訓謁者、使監領其事。訓考量隱括、知大功難立、具以上言。肅宗從之、遂罷其役、更用驢輦、歳省費億万計、全活徒士数千人。（『後漢書』列伝6、鄧訓伝）
- ・在職二年、所息省三億万計。（『後漢書』列伝23、鄭弘伝）
- ・復賜乘輿服御、珍宝輿馬、錢布以億万計。（『後漢書』列伝32、東平憲王蒼伝）
- ・比年羌寇特困隴右、供徭賦役為損日滋、官負人責数十億万。（『後漢書』列伝41、龐參伝）
- ・嵩、靈帝時、貨賂中官及輸西園錢一億万、故位至太尉。（『後漢書』宦者列伝68、曹崇伝）
- ・当此之時、四方征暴乱、車甲之費、克獲之賞、以億万計、皆贍大司農。（桓寛『塩鉄論』輕重第十四。王利器校注、1983年天津古籍出版社排印本を使用）
- ・武帝時、使上林苑中官奴婢、及天下貧民貲不滿五千、徙置苑中養鹿。因收撫鹿矢、人日五錢、到元帝時七十億万、以給軍擊西域。（『漢官旧儀』卷下）

これらの「億万」もやはり○億○万の省略と見るべきである。

結 語

本稿の結論はきわめて常識的である。日本の学界で「二百八十億万」を280億と理解してきたのは、説明はないけれども本稿と同じように考えてきた結果であるのかも知れない。それなら本稿は、その見方を確認したものにすぎないと言える。

最後に、漢代史籍に散見する巨万（鉅万）について触れておこう。巨万の注釈を見ると、『史記』「集解」に引く韋昭は「巨万、今万万」⁽⁸⁾、徐広（東晋の人）は「万万也」と言い、「索隱」も「巨万猶万万也」という⁽⁹⁾。『漢書』の顔師古の注は二箇所あるが、一つは「累百鉅万、謂数百万也」とあり、「累百」を数百と見なすと巨万=万万説であり、一つは「鉅万、百万也」とあって、一致しない⁽¹⁰⁾。私はやはり時代が最も近い韋昭注を採用し、巨万とは万万のこととすべきと思う。億万と巨万について、これまで区別し、「巨万」を「億万」の十分の一の単位と見ることで共通した（億万と巨万について、沈長雲氏は万万と千万、王獻唐氏は十万万と万万の関係と見る）。だが億万が〇億〇万の省略形であるなら、「億万」を一つの単位と見なして巨万との関係を問うこと自体が無意味となる。正しくは億と巨万の関係を問うべきである。しかも億が万万である以上、億と巨万は等しい。韋昭が「今人乃以万万為億」「巨万、今万万」といって、億と巨万を同じものと説明するのを尊重すべきである。

〔注〕

- (1) 布帛の重要性の指摘は、佐原康夫「漢代貨幣經濟論の再検討」（『中国史学』4、1994年）を参照。
- (2) 宮澤『宋代中国の国家と貨幣——財政・市場・貨幣』（創文社、1998年）序論。
- (3) 古典に見える億の用例と注釈の代表的なものは『経籍纂詁』巻102、億を参照。
- (4) 『国語』鄭語の「計億事、材兆物、収経入、行姦極。」の韋昭解に（四部叢刊本すなわち公序本）、

計算也。材裁也。賈・唐説、皆以万万為億。鄭後司農云、十万曰億、十億曰兆、從古數也。經常也。姦備也。數極於姦。万万曰姦。

賈・唐はそれぞれ賈逵・唐固である。なお士礼居叢書本（景天聖明道本）には、
計算也。材裁也。賈・虞説、皆以万万為億。鄭後司農云、十万曰億、万億曰兆、從古數也。經常也。姦備也。數極於姦也。万万兆曰姦。

とあり、法数が異なるほか、唐固でなく虞翻（三国の人）の名を挙げている。士礼居叢書本にいう鄭注の法数を兆の上位の京を加えて表示すると、以下ようになる。

10^0 (一)	10^1 (十)	10^2 (百)	10^3 (千)
10^4 (万)	10^5 (十万=億)	10^6 (十億)	10^7 (百億)
10^8 (千億)	10^9 (万億=兆)	10^{10} (十兆)	10^{11} (百兆)
10^{12} (千兆)	10^{13} (万兆=京)	10^{14} (十万兆=十京)	10^{15} (百万兆=百京)
10^{16} (千万兆=千京)	10^{17} (万万兆=万京=亥)		

この法数は、本文で表示する、下数・中数・上数および現代の方式とも異なるが、これら四種における億兆京……の単位名称の出現には規則性があるのに対し、士礼居叢書本『国語』鄭玄注の法数には、規則性のくずれたところがある。億より上位の兆・京・姦が 10^4 倍ごとに出現する

のに対し、億自体は 10^5 であることである。公序本『国語』の鄭注は一般に認められている古数（下数）であって不審な点はないが、士礼居叢書本鄭注の法数は誤りであろう。

また『国語』楚語下の「官有十醜為億醜。」の韋昭解に、
醜類也。以十醜承万為十万、十万曰億。古数也。今人乃以万万為億。

- (5) 『後漢書』列伝66、王景伝に、王景が滎陽から千乗海口に至るまで一千餘里に及ぶ渠隄を修築したときのこととして、

景雖簡省役費、然猶以百億計。

とある。李賢注は「十万曰億」とするが、修築規模の大きさからして、万万=億のほうが相応しいように思う。なおこの「百億を以て計る」内容は、布帛その他の財物の合計を錢建てで表現したものであろう。

- (6) かつて『尚書』『孝経』の注に、「億万」なる単位を述べたものがあるという。すなわち甄鸞『五經算術』卷上、尚書孝経兆民注数越次法に、
甄鸞按、呂刑云、一人有慶、兆民頼之。注云、億万曰兆、天子曰兆民、諸侯曰万民。……按注云億万曰兆、理或未尽。……若以下数言之、則十億曰兆。若以中数言之、則万万億曰兆。若以上数言之、則億億曰兆。注乃云億万曰兆者、正是万億也。……按尚書無此注。故從孝経注积之。とあるのがそれである。また『五經算術』に注した唐の李淳風は「按今孝経亦無此注。」とした上で、『尚書』『孝経』の注は鄭玄の注であろうと言う。『孝経』は天子章第二の「甫刑云」とある部分である。甄鸞と李淳風の記述によると『尚書』『孝経』の注に、かつて存在した「億万曰兆」の注がそれぞれ北周、唐までに無くなったという。そして甄鸞は、その注について「理未だ尽さざる或り」といい、正しくは「万億」だとする。「億万」という単位が存在しないことの傍証である。

- (7) 『尹湾漢墓簡牘』（中華書局、1997年）

- (8) 『史記』卷30、平準書

至今上即位數歲、漢興七十餘年之間、國家無事、非遇水旱之災、民則人給家足、都鄙廩庾皆滿、而府庫餘貨財。京師之錢累巨万（集解、韋昭曰、巨万、今万万）、貫朽而不可校。

- (9) 『史記』卷129、貨殖列伝

後年衰老而聽子孫、子孫脩業而息之、遂至巨万（集解、徐広曰、万万也）。故言富者皆稱陶朱公。

- (10) 『史記』卷117、司馬相如伝

治道二歲、道不成、士卒多物故、費以巨万計。（索隱、案、巨万猶万万也。案、數有大小二法。張揖曰、算法万万為億、是大數也。鬻子曰、十万為億、是小數也。）

- (11) 『漢書』卷24上、食貨志

至武帝之初七十年間、國家亡事、非遇水旱、則民人給家足、都鄙廩庾盡滿、而府庫餘財。京師之錢累百鉅万、貫朽而不可校。（師古曰、累百鉅万、謂數百萬万也。校謂計數也。）

『漢書』卷47、文三王伝

公孫詭多奇邪計、初見日、王賜千金、官至中尉、号曰公孫將軍。多作兵弩弓數十万、而府庫金錢且百鉅万（師古曰、鉅万、百万也。有百万者、言凡百也）、珠玉宝器多於京師。

（みやざわ ともゆき 史学科）

2001年10月17日受理